

解答

一

問一 a ゆうちょう b ひとなつ「つく」 c 無邪気 d 合点

問二 i ウ ii ア iii エ

問三 イ

問四 秋

問五 さっちゃんが口にした当り障りのない「常識的」な言葉の虚しさ。

問六 あこがれのような甘えのような感情

問七 イ

問八 夏夜さんが誰よりも愛しているのは娘さんやお孫さんなのであって、自分が同じ愛情を夏夜さんに求めてもかなえられないことはない。

問九 繊細「さ」

問十 エ

二

問一 a 分析 b 売買 c 富裕 d く「ちる」

問二 オ

問三 人名1 ウ 人名2 ア 人名3 エ 人名4 オ

問四 1 四分法思考を自由にあやつるユーモア感覚を身につけ、人として成熟できるという点。

2 現実にとられない自由な発想を持ち、創造的な営為を生み出せるようになるという点。

問五 エ

問六 (1) 常識のよろさ、偏りに気がつかない人

実生活に密着し、実益だけを尊ぶ人

(2) ウ

問七 役立たないことが役に立つ「ということ。」

問八 医師

問九 エ・カ

解説

一

問二 (・)「たしなみ」には、①趣味や余芸、②心得(技芸を身につけていること)、③節度(行き過ぎのない適当な程度)、④心がけ、などといった意味がありますが、文中では、人としてのエチケットに関連づけられていますから、③の意味で使われていると判断できます。

問三 息子を亡くした悲しみから何とか立ち直ろうとしているときだったので、できればその話題には立ち入ってほしくなかったのでしょう。だから、感情をこめず「さりげなく」言ったのです。ウは、「大好きな夏夜さん」という表現が不適切です。息子の死について語り合ったことを境にさっちゃんと夏夜さんは親しくなっていくのですから、この時点で「大好き」であったかどうか定かではありません。

問四 直前の「金木犀の香り」から判断しましょう。金木犀は秋、独特の強い芳香を放つ花をつけます。

問五 直後の夏夜さんの言葉に着目しましょう。さっちゃんの、「子供を持つと、母親は強くなりますね」という言葉に対し、夏夜さんは答えます。子供のために闘う母親は強くなったわけではない。「鎧」という重荷を背負っただけだ。さっちゃん自身も感じているように、「母親は強い」などという言葉は、母親の本当のつらさから目を背けただけの、うわべだけの「当り障りのない常套句」にすぎないものなのです。自分で口にしたにも関わらず、さっちゃんはこの言葉に虚しさすら感じてしましますが、夏夜さんも、そうした虚しい言葉の響きを「敏感」に感じ取り、さっちゃんの言葉をやんわりと否定したのです。

問六 さっちゃんは夏夜さんに対し、理想の母親像を重ねています。自分の実の母親の厳しさや、ユーモアのなさに比べ、夏夜さんの優しい風情や上品なたたずまいにあこがれのような気持ちを抱いていたのです。そうした心情については「あこがれのような甘えのような感情」と表現されています。

問七 夏夜さんのような人にあこがれ、彼女を母親と呼びたいと願っても、それは叶えられるわけもないのです。そうしたむなしさや切なさを「哀しさのようなもの」と表現しているのです。

問八 夏夜さんに理想の母親像を重ねていたさっちゃんでしたが、ある夜、夏夜さんが娘さんやお孫さんに愛情に満ちた眼差しを注いでいる姿を目にし、「夏夜さんにとって世界中で一番貴いもの」は娘さんであり、お孫さんであり、けっして自分ではないのだという当たり前ではあるが、さっちゃんにとってはつらい現実をつきつけられてしまします。「ああ、そうよね」には、そうした「現実」に対する落胆や悲しみ、あるいは、叶えられもしないことを願っていた自分に対する憐れみや蔑み、といった複雑な感情がこもっています。

問九 夏夜さんに理想の母親像を求めることのむさしさを感じたさっちゃんは、あらためて実の母親のことを思います。彼女も夏夜さん同様に、「鎧」を着ていたのかもしれないと。そしてもしそうなら、その「鎧」の下にはやはり夏夜さんと同じ、傷を負わないようにガードしなくてはならない「心の一番柔らかな部分」を持っていたのかもしれないと。そうした、心の傷つきやすさ、デリケートさを「繊細」と言います。

問十 「——(ダッシュ)」がついた部分を追っていくと、さっちゃんの心の動きをおさえていくことができます。まず、「ああ、そうだ。タベ夏夜さんの一家が……」は、さっちゃんが夏夜さん一家と会ったことに関し、「ある思い」を持ったことを暗示します。そして、「私、きつと、いつも自分の『母親』を探していたんだ……」「夏夜さんが娘さんの一家を連れて……寂しく思った」「おろかなことだ」と追っていくと、その「思い」が何であったのが明らかとなります。また、その後の二つの「——」の部分も、つなげて読んで見ると、実の母親へのさっちゃんの思いがつづられていると分かります。

二

問三 《人名4》には、「アメリカ西部のほら話」「落語『あたま山』」と並ぶような「ほら話やナンセンスの世界」と言える作品の、著者名が入ります。すぐ前の段落の「大溪谷」の話が「アメリカ西部のほら話」と、「頭の上にできた池」の話が「落語の『あたま山』」とそれぞれ対応しているので、《人名4》の著した作品は「笑っている猫」「『非誕生日』のプレゼント」と対応します。身体が消失してもその笑いだけを空間に残す「笑う猫」とは、「不思議の国のアリス」に登場する「チェシャ猫」のことです。また、『非誕生日』のプレゼントとは、「鏡の国のアリス」の中で、ハンプティ・ダンプティがアリスに見せた、誕生日でない日に贈られたプレゼントのことです。《人名4》には、「不思議の国のアリス」「鏡の国のアリス」の作者であるルイス・キャロルが入ります。

問四 まず、「ユーモア感覚」とは……とられない物の見方や価値観を持ち、自由な発想を生むゆとりのある精神……「第一の常識をわきまえながら第二の常識にとられないのが人間としての成熟であり、それを可能にするのがユーモア感覚である」という記述に着目しましょう。つまり一つの利点は、「ユーモア感覚を身につけ、人として成熟できる点」だと言えます。できれば、「ユーモア感覚は……四分法で物を眺め」ることである、という内容も含めましょう。次に、「創造的な営為はすべて第二の常識から自由になるところで生まれている」「現実にとられない、人間の自由な発想は……すばらしい世界をつくる」などといった記述に着目しましょう。これが二つめの利点と考えられますから、これらをまとめましょう。

問五 空欄の直前の「常識が見落としがちな」に着目します。つまり空欄には「常識」からはややずれている考え方を入れます。常識的に考えれば「幸福」なものと言える「結婚」を「不孝」とするーBや、不幸なものと考えがちな「離別」を「幸福」ととらえる2Aが、それにあたります。

問六 (1) 「二分法の世界に安住する観念の固定した人」は、ものごとを「いいか」「悪いか」でしか判断できず、したがって固定された常識を信奉し、「常識の moreover、偏りに気がつかない人」となっています。また、観念を固定しているがゆえに、常識にとられない発想、たとえば「ほら話やナンセンスの世界」についていけず、「実生活に密着し、実益だけを尊ぶ人」となっています。

(2) 常識的な考え方ができない人にとって、結婚を不幸なものとしてとらえる考え方や、離別を幸福なこととしてとらえる考え方は、どのようなものと思えるでしょう。このような発想は、あえて人と違うことをやりたがるだけの「アマノジャク」な人、あるいは「ヘソ曲がり」な人特有の、ひねくれた発想と思えるのでしょうか。

問七 「木の霊」の話は、莊子の説く「無用の用」を分かりやすく説明するための比喩です。「無用の用」とは、「役立たないことが役に立つ」という意味です。「木の霊」は、ほかの生きものから必要とされない存在となったこと、すなわち「役立たないこと」が、寿命をまっとうするという我が身にとって最も重要なことに「役立った」と言っています。

問八 盲腸は、現代のヒトにとって生理機能がほとんどなく、役に立たないものと考えられてきました。しかも、しばしば炎症を起こして切除手術を必要とします。このことを、医者は盲腸を切除するという仕事をする上で、盲腸が必要だ、とジョークで言っているのです。

問九 エは「唯一絶対の尺度」が不適切です。ユーモア感覚を持つ人は固定された観念にとられない人なのですから、そうした人の持つ尺度が一つだけ、ということはありません。力は、「表現力を持つ莊子こそが、真のユーモリスト」が適切です。莊子が真のユーモリストと呼ばれる理由は、「伸縮自在の物さし」を持っているからであり、「表現力」が豊かだからではありません。